



自然遊学館だより

2006 WINTER



2006.01.13 発行
貝塚市立自然遊学館

■行事レポート

- 「秋のハイキング 箱谷川の生きもの」・・・1
- 「自然生態園の植物しらべ」・・・3
- 「自然生態園のバッタ調べと
鳴く虫の声を聞く会」・・・4
- 「近木川永久橋川原 秋の帰化植物」・・・5
- 「農業庭園たわわ 池さらい」・・・6
- 「和泉葛城山クリーンハイキング」・・・8
- 「クジラの骨格すすはらい」・・・8

■生きものよみもの

自然遊学館所蔵チョウ類標本・・・9

■自然遊学館来館者 100 万人記念に

寄せられたメッセージの紹介・・・11

【泉州生きもの歳時記】

エビ 海老・・・・・・・・・・・・・・13

■館長コーナー

冬 1・・・・・・・・・・・・・・14

■投稿

近木川の水生昆虫 5 :

カタツムリトビケラ・・・・・・・・15

■寄贈標本の紹介・・・・・・・・16

■遊学館スタッフ日誌・・・・・・・・17

■ありがとう・・・・・・・・18

■お知らせ・・・・・・・・19

No.38

■行事レポート

秋のハイキング 箱谷川の生きもの

場所：貝塚市蕎原・箱谷

日時：2005年10月2日(日) 10:00～15:00

参加者 21名

快晴とはいかないもののまずまずの天気
で、集合場所の蕎原バス停から、まずは近木
川沿いの田畑へ向かいました。本日の助っ人
は前館長の上久保文貴先生です。その他、貝
塚市内などでトンボの調査をされている北
田誠さんや水生生物の調査をされている森
本静子さんも駆けつけてくれました。畑の小
道ではさまざまな野花の生える環境の中、バ
ッタやカマキリなどの昆虫類や、カエルやヘ
ビなどが観察できました。また、小道に沿っ
て流れる小さな水路には多くのカワナや
マシジミ、イモリが生息し、今となっては懐
かしい昔ながらの田園環境が残っているの
ではないかと思います。

昼からは参加者各人の好みに合わせよう
と、植物、動物、水生昆虫の班に分かれて、
それぞれの目的地へ向かいました。箱谷川は
近木川の支流にあたり、幅2mほどの小さな
川です。三面張りのコンクリートの区間もあ
りますが、土の堤で川底に石ころが転がる場
所もあり、そこでは水生昆虫も採集できまし
た。浅い川なので、子どもたちも川に入って
タモ網で、エビや魚を追いかけしていました。

下に今回のハイキングで観察された生き
もののリストを記します。(同定：岩崎拓、上久保
文貴、白木江都子、西澤真樹子、山田浩二、湯浅幸子)



箱谷川で生きものをさがす

- <爬虫類>シマヘビ、ヤマカガシ
- <両生類>ニホンアマガエル、ヌマガエル、トノサマガエル、イモリ
- <魚類>カワムツ、カワヨシノボリ
- <環形動物>チスイビル
- <貝類>カワナ、マシジミ
- <甲殻類>ミナミヌマエビ、サワガニ
- <水生昆虫>シロタニガワカゲロウ幼虫、カワトンボ幼虫、オニヤンマ幼虫、コオニヤンマ幼虫、シマアメンボ、ヒメガムシ、ニンギョウトビケラ幼虫、コカクツツトビケラ属幼虫
- <昆虫>オニヤンマ、コシボソヤンマ、コヤマトンボ、コオニヤンマ、シオカラトンボ、ウスバキトンボ、ヤマクダマキモドキ、ウスイロササキリ、ササキリ、クビキリギス幼虫、エンマコオロギ、ツツレサセコオロギ、アオマツムシ、クサヒバリ、カネタタキ、オンブバッタ、トノサマバッタ、オオカマキリ、ハラビロカマキリ、コカマキリ、ヒメカマキリ、チッチゼミ、ツクツクボウシ、オオトガリヨコバイ、ヒメトビウナ、トビイロウナ属、ヨコヅナサシガメ幼虫、アカスジカスミカメ、アカスジキンカメムシ幼虫、トゲシラホシカメムシ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、オオクロツヤヒラタゴミムシ、ウリハムシ、ヒゲナガヤチバエ、キチョウ、モンシロチョウ、アカタテハ、ヒメアカタテハ、ルリ

タテハ、ミドリヒョウモン、ヤマトシジミ、イチモンジセセリ、ウスバツバメガ、キオビツチバチ、スズバチ、コガタスズメバチ、ヒメスズメバチ

<植物>

蕎原バス停横から箱谷林道にむかう畑

<きく科>ヨメナ、ヨモギ、*セイタカアワダチソウ、*アメリカセンダングサ、アキノノゲシ、タカサブrou、センダングサ、*ナルトサワギク、*ヒメムカシヨモギ、*ハルジオン、トキンソウ<うり科>カラスウリ<おおばこ科>オオバコ<きつねのまご科>キツネノマゴ<ごまのはぐさ科>アゼナ、トキワハゼ<なす科>*アメリカイヌホウズキ<しそ科>トウバナ<くまつづら科>*ヤナギハナガサ<きょうちくとう科>テイカカヅラ<あかばな科>チョウジタデ、*コマツヨイグサ<みそはぎ科>*ホソバヒメミソハギ<かたばみ科>カタバミ<ふうろそう科>ゲンノショウコ<まめ科>ヤブマメ、コマツナギ<ばら科>ナワシロイチゴ<あぶらな科>*マメグンバイナズナ、イヌガラシ、*クレソン<あけび科>アケビ<ひゆ科>ヒナタイノコヅチ、*ホナガイヌビユ<たで科>イヌタデ、ギシギシ<いらくさ科>カラムシ、クワクサ<やまのいも科>カエデ<コロコ<ひがんばん科>ヒガンバナ<ゆり科>ジャノヒゲ<つゆくさ科>ツユクサ<かやつりぐさ科>コゴメガヤツリ、タマガヤツリ、ホタルイ<いね科>メヒシバ、イヌビエ、チカラシバ、*オオクサキビ、キンエノコロ、アキノエノコログサ、*コスズメガヤ、オヒシバ、ギョウギシバ、アゼガヤ<おもだか科>オモダカ<おしだ科>ホシダ<わらび科>イノモトソウ<かにくさ科>カニクサ<とくさ科>スギナ

箱谷へぬける林道～箱谷畑～野井谷池へ

<きく科>*オオアレチノギク、*アメリカセンダングサ、*セイタカアワダチソウ、シラヤマギク、ヨモギ、*ハキダメギク、アザミ sp, トキンソウ、ヨメナ、ヒヨドリバナ、シュウブソウ、ヤブタバコ、ガンクビソウ、ムラサキニガナ、*ダンドボロ

ギク<ききょう科>ミゾカクシ<うり科>カラスウリ、スズメウリ<あかね科>アカネ、ヘクソカズラ、ハシカグサ、ツルアリドウシ<きつねのまご科>キツネノマゴ<ごまのはぐさ科>*アメリカアゼナ、トキワハゼ<なす科>マルバノホロシ<しそ科>ヒメジソ、アキノタムラソウ<くまつづら科>クサギ<かきのき科>カキ<つつじ科>モチツツジ<せり科>チドメグサ、ツボクサ<うごぎ科>キツタ、メダラ<みずき科>アオキ<みそはぎ科>*ホソバヒメミソハギ<おとぎりそう科>オトギリソウ<つばき科>チャ、ヒサカキ<ぐみ科>ナワシログミ<ぶどう科>ツタ、ノブドウ、エビヅル、ヤブガラシ<もちのき科>イヌツゲ<うるし科>ヌルデ、ヤマウルシ<とうだいぐさ科>エノキグサ、アカメガシワ<ふうろそう科>ゲンノショウコ<まめ科>ヤブマメ、クズ、トキリマメ、ヌスビトハギ、シロツメクサ、*アレチヌスビトハギ、ノササゲ<ばら科>クサイチゴ、ダイコンソウ、フユイチゴ、オヘビイチゴ、ナワシロイチゴ、キンミズヒキ、ヘビイチゴ、カマツカ、ビワ、カナメモチ、ヤマザクラ<ゆきのした科>ウツギ、ノリウツギ<あぶらな科>*クレソン<あけび科>アケビ<きんぼうげ科>アキカラマツ、センニンソウ<なでしこ科>ウシハコベ<しきみ科>シキミ<ひゆ科>イノコヅチ<たで科>イヌタデ、ハナタデ、ミズヒキ、イタドリ、ミゾソバ、<いらくさ科>カラムシ、アオミズ、ヤブマオ、メヤブオ<くわ科>ヒメコウゾ、クワクサ<ぶな科>アラカシ、ウバメガシ、コナラ<どくだみ科>ドクダミ<すいれん科>ヒツジグサ<しょうが科>ミョウガ<あやめ科>シャガ<やまのいも科>ヤマノイモ、オニドコロ、カエデ<コロコ<ひがんばん科>ヒガンバナ<ゆり科>ジャノヒゲ、サルトリイバラ、ヤブカンゾウ、ショウジョウバカマ、ホトトギス、ギボウシ、ノギラン<みずあおい科>コナギ<つゆくさ科>ツユクサ<さといも科>カラスビシャク、ムロウマムシグサ<かやつりぐさ科>ナキリスゲ、シラスゲ、アゼガヤツリ、ヒメクグ、タマガヤツリ、コゴメガヤ

ツリ、ホタルイ、ミヤマシラスゲ、ハリイ<やし科>シュロ<いね科>メヒシバ、アシボソ、チヂミザサ、カゼクサ、ネズミガヤ、キンエノコロ、*シマスズメノヒエ、ノガリヤス、メダケ、コブナグサ、エノコログサ、ヒメアシボソ、ヌカキビ、*メリケンカルカヤ、チカラシバ、ススキ、イヌビエ、チガヤ、トダシバ、*キシユスズメノヒエ<おもだか科>オモダカ<ひるむしろ科>フトヒルムシロ<みくり科>ナガエミクリ<うらぼし科>ミツデウラボシ<ししがしら科>シシガシラ<おしだ科>イノデ、ヤブソテツ、ホシダ、ミゾシダ、ヤワラシダ、シケシダ、リョウメンシダ<きじのおしだ科>キジノオシダ<わらび科>オオバノイノモトソウ、ワラビ、ホラシノブ、イワガネソウ、フモトシダ<うらじろ科>コシダ、ウラジロ<ぜんまい科>ゼンマイ<とくさ科>スギナ

※ なお、この行事の際に、こどもエコクラブ「近木っ子探検隊」による生きもの調査（野生生物観察事業、環境省主催）も同時に行いました。

(山田 浩二・湯浅 幸子)

自然生態園の植物しらべ

場所：二色市民の森

日時：2005年10月8日（土）13:00～16:00

あいにくの雨のため、自然遊学館元館長の上久保先生と2人で植物しらべをしました。各エリアには貝塚市内の植物を移植しています。

海辺の植物コーナーではコウボウムギ、コウボウシバ、ハマエンドウ、ハマヒルガオ、ハマボウフウがおもな植物です。他によそからハマゴウ、ハマボッスもいれています。他

の植物は植生を守るため、定期的にぬいています。カタバミ、コマツヨイグサ、コセンダングサ、コニシキソウ、ヒメムカシヨモギ、ノゲシなどがよくはいつてくる植物です。

ドングリの森では、クヌギがよく育ち、あとコナラ、アベマキ、クリ、ウバメガシなどがあります。2、3年前から、アベマキ以外はドングリをつけるようになりました。

バッタの原っぱでは、メヒシバ、エノコログサ、キンエノコロ、シマスズメノヒエ、メリケンカルカヤといったイネ科の植物を残しています。またトンボの池では、アンペライ、ヨシ、セリ、ミソハギ、カサスゲ、アゼガヤツリがよく育ち、セキショウや珍しいコガマも定着しています。

以上、各エリアのおもな結果を記しました。1990年に埋め立てが完成し、1997年からつくってきた自然生態園では、移植した植物も生長し、移植したものを含め107種が観察されました。以下にリストを記し、移植した植物についてはゴシックの字体で表しています。



自然生態園での植物調査

《海辺の植物コーナー》

コウボウシバ、コウボウムギ、ハマエンドウ、ハマヒルガオ、ハマボウフウ、ハマゴウ、ハマボッス、アメリカセンダングサ、オオアレチノギク、アレチノギク、ヒメムカシヨモギ、セイタカアワダチソウ、ノゲシ、セイヨウタンポポ、コセンダングサ、コウライシバ、ススキ、メヒシバ、エノコログサ、メリケンカルカヤ、クグガヤツリ、オッタチカタバミ、コマツヨイグサ、コニシキソウ、エノキグサ、ヘクソカズラ、コミカンソウ、ノイバラ、テリハノイバラ、ダンチク、ウバメガシ、スイカズラ

《ドンダリの森》

クヌギ、コナラ、クリ、アベマキ、アオキ、エノキ、シャリンバイ、アカメガシワ、ピラカンサ、トベラ、ウバメガシ、キツタ、アラカシ、ヤマモモ、イヌマキ、ススキ、ギョウギシバ、コウライシバ、イタドリ、シャガ、メリケンカルカヤ、オッタチカタバミ、ジャノヒゲ、クサイチゴ、ヒメムカシヨモギ、ホシダ、ノブドウ、セイタカアワダチソウ、フキ、ヤブコウジ、フユイチゴ、ヨモギ、コセンダングサ、キンエノコロ、ヘクソカズラ、シマスズメノヒエ、セイヨウタンポポ、ヒガンバナ、アキノエノコログサ、ツユクサ、コマツヨイグサ、ヤブラン

《バッタの原っぱ》

ススキ、メヒシバ、メリケンカルカヤ、シマスズメノヒエ、エノコログサ、キンエノコロ、カヤツリグサ、クグガヤツリ、ヒメムカシヨモギ、ヨモギ、コセンダングサ、セイタカアワダチソウ、オッタチカタバミ、カタバミ、マルバヤハズソウ、コマツヨイグサ、コニシキソウ、ヒメクマツヅラ、ヘクソカズラ、ヤブマメ、ナワシロイチゴ、ピラカンサ、アケビ、キョウチクトウ、クロマツ、アベマキ、ヒノキ、ヤマコウバシ

《トンボの池》

セリ、ヨシ、ボントクタデ、アンペライ、ミソハギ、カサスゲ、アゼガヤツリ、ススキ、メヒシバ、ドクダミ、ギョウギシバ、オオオナモミ、ヒロハホウキギク、コガマ、セキシヨウ、オッタチカタバミ、セ

イタカアワダチソウ、メリケンカルカヤ、コセンダングサ、ノコンギク、キンエノコロ、エノコログサ、ススキ、ナワシロイチゴ、ヨモギ、マルバヤハズソウ、オトギリソウ、ウバメガシ、モチツツジ、コバノミツバツツジ、ソヨゴ、コナラ、シャリンバイ、エゴノキ、ヤマモモ、ムラサキシキブ、アカメガシワ、マルバハギ、カワチハギ、キヌヤナギ、トベラ、シャシャンボ、リョウブ、ネズミモチ、ナンキンハゼ、ヒサカキ

(湯浅 幸子)

自然生態園のバッタ調べと 鳴く虫の声を聞く会

場所：二色市民の森

日時：2005年10月8日(土) 13:00~21:00

参加者 8名

自然遊学館に隣接する自然生態園では毎年、秋のこの時期に、バッタ調べと鳴く虫の声を聞く会を行ってきました。今年は午前中からすさまじい豪雨で、行事が行われるのかという問い合わせには、「スタッフは雨の中でも調査を行います、参加されるのは自由です」という対応を取りました。昼過ぎからは雨が小降りになり、浅井さん一家や木室君たちに手伝ってもらって、バッタの原っぱで8種、海浜植物ブロックで7種のバッタ目昆虫を採集しました。

バッタの原っぱ

ホシササキリ、クビキリギス、エンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、ツツレサセコオロギ、シバズ、マダラスズ、マダラバッタ

海浜植物ブロック

ツユムシ、エンマコオロギ、ツヅレサセコオロギ、ヒロバネカンタン、シバズ、オンブバッタ、マダラバッタ

夕方からは再び豪雨となり、講師の河合正人さんには鳴く虫の声を聞く会を中止にしましたと連絡。雨の中お越し下さった北川さん一家と、鳴く虫の声を聞きました。雨が強いうちは、鳴いている虫の数も少なかったのですが、雨が止みだしてからは7種の声を聞くことが出来ました。

雨が降らなかった翌日の晩にも同様の調査を行い、雨が上がりかけているときに一番鳴き出しにくいのは樹上性のアオマツムシだということが分かりました。

自然生態園で鳴いていた虫

エンマコオロギ、ハラオカメコオロギ、ミツカドコオロギ、ツヅレサセコオロギ、ヒロバネカンタン、シバズ、カネタタキ

造成地（1990年に埋立完了）につくられた「市民の森」では、これまでにバッタ目昆虫として、キリギリス科6種、コオロギ科10種、ケラ科1種、カネタタキ科1種、オンブバッタ科1種、バッタ科5種の合計24種が確認されてきました。今年の調査では結局、市民の森で新たに確認された種はありませんでした。以下に、この24種が市民の森で初めて確認された年をまとめました。

キリギリス科 6種

クビキリギリス 1997年、サトクダマキモドキ 1998年、ホンササキリ 1999年、クサキリ 1999年、ツユ

ムシ 2001年、ウスイロササキリ 2004年

コオロギ科 10種

エンマコオロギ 1995年、マダラスズ 1995年、アオマツムシ 1997年、ミツカドコオロギ 1999年、ハラオカメコオロギ 1999年、ヒロバネカンタン 1999年、シバズ 2001年、ツヅレサセコオロギ 2001年、ウスグモズ 2001年、キンヒバリ 2001年

ケラ科 1種

ケラ 1994年

カネタタキ科 1種

カネタタキ 2001年

オンブバッタ科 1種

オンブバッタ 1995年

バッタ科 5種

イゴバッタ 1994年、ショウリョウバッタ 1995年、マダラバッタ 1995年、クルマバッタモドキ 1999年、トノサマバッタ 2003年

貝塚市全体では、90種近くのバッタ目昆虫が確認されています。市民の森では今後、他にどのような種が加わっていくのか興味が持たれます。

* この行事は「なぎさ海道」市民活動助成金を受けています。

(岩崎 拓)

近木川永久橋川原 秋の帰化植物

場所：近木川下流「永久橋」川原

日時：2005年11月12日(土) 14:00～15:00

参加者 13名

近木川永久橋川原は、河口に近い位置にあります。河口にかかる潮騒橋横を川に沿って

永久橋にむかって歩きました。講師として前館長の上久保文貴先生に来ていただきました。川にはヨシ、枯れたオオクサキビが続き、ダンチクなども見られました。新井井堰あたりのヨシの間から、カワセミが飛び立ちました。青い色がとてもきれいでした。土手のフェンス沿いのヨモギにはアメリカネナシカズラが沢山つき、ラーメンが落ちているような姿は人気がありました。

永久橋川原は、土がかなり堆積して冠水もないため、数年前のヨシ原はすっかり消え、荒地の植物ばかりになっています。川原に降りるハシゴ段にはアレチウリ、ホシアサガオが巻き付いていました。アレチウリは実の時期で、実には細い針のようなトゲが沢山あります。軍手の上からでもトゲがささり、皮膚に残るのでなかなかやっかいな植物です。川原には他にクズ、カナムグラが目立ちました。

永久橋川原の植物

くきく科>*オオオナモミ、*セイタカアワダチソウ、アキノノゲシ、ヨモギ、ノゲシ、*コセンダングサ、*アメリカセンダングサ<うり科>*アレチウリ<あかね科>ヤエムグラ<なす科>クコ、*アメリカイヌホオズキ<ひるがお科>*ホシアサガオ<せり科>ヤブジラミ<まめ科>クズ、カラスノエンドウ<ばら科>ノイバラ<おしろいばな科>*オシロイバナ<ひゆ科>*ホソアオゲイトウ<たで科>*アレチギシギシ、ミゾソバ、イシミカワ<いらくさ科>*ナンバンカラムシ<くわ科>カナムグラ<ひがなばな科>ヒガンバナ、スイセン(逸出)<ゆり科>ノビル<つゆくさ科>ツユクサ<かやつりぐさ科>*メリケンガヤツリ、シラスゲ、*シュロガヤツリ<いね科>オギ、メヒシバ、ヨシ、アキメヒシバ、アキノエノコログサ、イヌビエ、ケ

イヌビエ、ヌカキビ、*イヌムギ、アシボソ生コン前川原から、下流にかけて
くきく科>*コセンダングサ、*セイタカアワダチソウ、*ヒメムカシヨモギ、*ナルトサワギク、*ヒロハホウキギク<すいかずら科>ソクズ<あかね科>ヘクソカズラ<なす科>クコ<くまつづら科>*ヤナギハナガサ<ひるがお科>*アメリカネナシカズラ<あかばな科>*コマツヨイグサ<とうだいぐさ科>*オオニシキソウ、*コニシキソウ<ばら科>ノイバラ<つづらふじ科>アオツヅラフジ<きんぼうげ科>センニンソウ<すべりひゆ科>ハゼラン(逸出)、*ヒメマツバボタン<ひゆ科>*ホナガイヌビユ<にれ科>ムクノキ、エノキ、アキニレ<やまのいも科>マルバドコロ、ヤマノイモ<ゆり科>ニラ<いね科>ヨシ、*シナダレスズメガヤ、オヒシバ、エノコログサ、メダケ、*オオクサキビ、ダンチク、*キシユウスズメノヒエ、*セイバンモロコシ<がま科>ヒメガマ

* 雨だったため、規模を縮小して実施しました。

(湯浅 幸子)

農業庭園「たわわ」池さらい

場所：馬場、農業庭園「たわわ」の小池

日時：2005年11月23日10:00~15:00

参加者 50名

前日に館の水中ポンプでは出力が足りないことに気づき、自然遊学館わくわくクラブの北川敏喜さんをお願いし、エンジン付き水中ポンプをお借りしました。

遊学館スタッフにしては珍しく8時半に館を出発しましたが、途中善兵衛ランド交差点近くでタヌキの死体を拾いました。(早起

きは3文の得)

9時に農業庭園「たわわ」の小池に到着し、わくわくクラブ員が加わって、それぞれの持ち場で準備を始め、9時半にはポンプを始動させ、水抜きを開始できました。

10時、川崎喜三郎たわわ農事組合長や畠副組合長・南野理事のあいさつ後、向井さんが胴長を穿いて泥の中に入り、わくわくクラブ員やスタッフがバケツリレーして池底の泥を池の外に出す一方、参加者は池周辺の草刈りや泥中から顔を出すザリガニ・スジエビ・ウシガエルなどを採集しました。泥の量がすごいので、山田量崇さんや山田浩二さん、西澤さんも胴長を穿いて池に入りましたが、今年も相当な泥の深さで、泥に体をとられ何度も立ち往生しました。

周辺で採集した植物の説明では、子どもたちにはフユイチゴが大人気、大人には差し入れの蒸したムカゴ(ヤマイモの)が人気でした。

昼食と自由時間の後1時から作業再開、わくわくクラブ員大活躍で、泥あげは急ピッチで進み、子どもたちは、わくわくクラブの日高夫妻の指導により、池から採集した動物の絵を書いて看板を作りました。

大川内さんを中心とする草刈隊が鎌を使って奮闘、栗苗木の周りがとてもきれいになりました。2時過ぎに作業を終了し採集物の紹介と解説、横の澄んだ流れの川に入って道具の泥を落とし、完成した看板3枚を池の周囲に立てました。

2時過ぎ、閉会のあいさつの折に農事組合からみかんを頂き、畠さんが「50年ぶりに

樋の一部が見えました」と指された方向に、朽ちて黒くなった木杭が見えました。その下には馬というものがあるはずだそうで、池の樋にまつわる興味深いお話を伺いました。来年の池さらいでは、ぜひ馬も見たいと畠さんがおっしゃり、事前に打ち合わせをして、畠家に残る道具をお借りして池さらえをしようと約束し、予定通り3時に解散しました。

池周囲の植物

<きく科>*ベニバナボロギク、ヨシノアザミ、*ナルトサワギク、ヨモギ、*オオアレチノギク、タカサブロウ、ノゲシ、*コセンダングサ、*セイタカアワダチソウ、*ハルジオン、シュウブソウ、アキノノゲシ、ヨメナ<あかね科>ヘクソカズラ<おおばこ科>オオバコ<なす科>イヌホオズキ、*アメリカイヌホオズキ<しそ科>*ヤブチョロギ、イヌコウジュ<きょうちくとう科>テイカカズラ<うこぎ科>タラ<ぶどう科>キレハノブドウ<まめ科>フジ<ばら科>オヘビイチゴ、フユイチゴ<あぶらな科>タネツケバナ、イヌガラシ<つづらふじ科>*ヒメクマツヅラ<きんぼうげ科>センニンソウ<なでしこ科>ウシハコベ<たで科>イヌタデ<いらくさ科>*ナンバンカラムシ<くわ科>イヌビワ<やまのいも科>ヤマノイモ<ゆり科>サルトリイバラ<かやつりぐさ科>*メリケンガヤツリ、ヒメクグ<やし科>シュロ<いね科>ヌカキビ、ノガリヤス、カズノコグサ、アキノエノコログサ、メヒシバ、ススキ、ネザサ

※ なお、この行事の際に、こどもエコクラブ「近木っ子探検隊」による生きもの調査(野生生物観察事業、環境省主催)も同時に行いました。

(白木 江都子)

和泉葛城山クリーンハイキング

場所：和泉葛城山

日時：2005年11月13日（日）9:00～15:00

参加者 79名

都市計画課が主催する恒例行事に植物案内者として参加しました。今年は、一般参加者・緑の少年団・自然環境保全指導員以外に、蕎麦子ども会の親子が加わり、落伍しそうな大人たちも元気ももらいました。

びわ平での休憩時には、ウバメガシ・ネジキ・コナラ・コバノミツバツツジ・アカマツを説明しましたが、ひときわ紅葉のすばらしかったカエデ類（イロハモミジ・ウリハダカエデ・コハウチワカエデ）について、話す機会がなかったのは残念でした。山頂のブナはブナ愛護会の方々が案内・説明してくださいました。



ブナ林を眺める参加者

（白木 江都子）

クジラの骨格すすはらい

場所：自然遊学館

日時：2005年12月3日（土）13:00～15:00

参加者 16名

自然遊学館の館内で展示されている小型クジラ「マゴンドウ」の全身骨格。1982年に和歌山県太地町で捕獲され、春木漁港で解体されて肉をとった残りの骨を羽衣学園短期大学の田川研究室がひきとり、1年かけて処理をして、全身骨格に組み立てて学園祭に展示。その後、1993年にできて間もない自然遊学館に寄贈されました。全長約4mの迫力ある骨格標本は、来館者の目をひきつけ遊学館の名物です。

そんなマゴンドウですが、実は掃除をしたのは記憶にないほど昔。約10年分のホコリがそのままになっていました。今回は「クジラってどんな生きものか」「クジラの骨ってどうなっているのか」を学んでから、持ち寄った古い歯ブラシで徹底的に「すすはらい」をしてもらいました。

参加者はまずクジラクイズに挑戦。

- ①クジラの祖先はどんな動物？
- ②歯クジラが持つ超能力・エコロケーション（超音波）のしくみは体のどこにある？
- ③マゴンドウの大好きな食べ物は？

※答えは遊学館だよりのどこかにかくれていますなどなどの問題がありました。クジラは私たちと同じ哺乳類で、手足が変化してヒレになったこと、毛がないこと、鼻の穴が頭のとっぺんにある以外は共通点が多いことなどを勉強したあと、いよいよ掃除の開始。

全員を「あたま班」「くび班」「むね班」「肩と前足班」「おなか班」「こし班」「しっぽ班」に分け、それぞれ担当の場所に骨の名前を書いた札をさげてもらってからはじめました。

掃除をはじめたとたん、もうもうと舞うホコリにびっくり。ヒレの亚克力板もていねいに雑巾がけをして、見違える程きれいになりました。



マゴンドウをとりかこんで、お掃除。

今年始めて実施したこの行事は、マゴンドウの骨格標本をあらためてじっくり見てもらいたいという気持ちで企画されました。館の入り口で骨格標本を見た子どもたちの第一声は、いつでも「あ、恐竜!」。そのたび「いいえあれはクジラで…」といちいち説明するよりも、一度マゴンドウのことをしっかり勉強してもらえば、勉強した人が知らない人に教えてくれるかも…という作戦でもあったのです。果たしてその成果は?

(西澤 真樹子)

■生きものよみもの

自然遊学館所蔵チョウ類標本

2005年11月に貝塚市地藏堂在住の西村恒一さんに蕎原産のムラサキツバメ(チョウ目シジミチョウ科)のオス1個体・メス1個体を寄贈していただきました(写真はメス)。西村さんが食樹のシリーブカガシ上で採集した幼虫を飼育されたもので、羽化日はオスが2005年10月7日、メスが2005年9月27日です。本種の所蔵によって、自然遊学館のチョウ類標本は74種となりました。



ムラサキツバメのメス成虫

ムラサキツバメには後翅に尾状突起があり、その先端だけが白くなっていて、やけに目立ちます。この成虫は葉上に止まっているときに、尾状突起をそれがあたかも「触角であるかのように」動かします。もちろん尾状突起だけを動かすことはできないので、後翅をひねることによって、尾状突起が「触角のように」動くことになります。

どちらが頭でどちらが尾かと悩んでいるうちに、採りそこねたり写真を撮るのを忘れ

てしまったりという方もおられるかもしれませんが。これは自分の体の一部を頭や目に似せる「自己擬態」と言われるもので、これによって敵の攻撃をダメージの少ないところに向けさせ、その部分を犠牲にして敵から逃げおおせるのだと一般的に説明されています。

ちなみに所蔵 72 種目のナガサキアゲハも所蔵 73 種目のオオムラサキも西村恒一さんに寄贈していただいたもので、自然遊学館創館 10 周年を記念して編集されたリスト (2003 年 12 月発行) の所蔵 71 種から 3 種増えたこととなります。このうち、ナガサキアゲハとムラサキツバメはともに近年分布域を北へと拡大している種です。

大阪昆虫同好会の「大阪府の蝶」(2005 年 6 月発行) には、大阪府の蝶類として 102 種がリストアップされています(絶滅種 3 種を含み、偶産種・迷蝶・人為的移入種を除く)。いま貝塚市内に生息しているのにまだ発見されていない種もあれば、これから分布域を広げてくる種もあるかもしれません。それとは逆に、1994 年に橋本夏次氏、1995 年に北田誠氏によって採集されたサツマシジミとヤクシマルリシジミのように、最後の採集から 10 年以上が経過し、現在生息しているのか心配な種もあります。

この他、2003 年 6 月 4 日の馬場におけるウラゴマダラシジミの採集記録(平田慎一郎氏: きしわだ自然資料館所蔵)、2002 年 4 月 20 日の馬場におけるヤマキマダラヒカゲの目撃記録(澤田義弘氏: 本誌 24 号)を含めると、76 種ということになります。

参考文献

- 上杉兼司(1997) チョウ類の擬態・保護色・眼状紋.
「日本動物大百科 9: 昆虫 II」(平凡社).
西村恒一(2005) 貝塚市内でのチョウ類の採集等の記録. 南大阪の昆虫 7 (4).
保田淑郎(2003) 貝塚市のチョウ. 「貝塚の自然—貝塚市立自然遊学館創館 10 周年記念号—」(貝塚市立自然遊学館).

(岩崎 拓)

100まんが にん おめでとう

しぜんゆうがくかんとどいた、
みなさんからのメッセージ。



遊学館は、2005年11月5日にのべ入館者100万人を突破しました。みなさんからよせられたうれしいメ

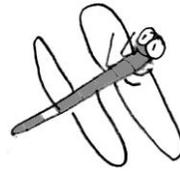
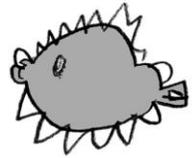
ッセージをまるごと紹介します！

おめでとうございます(貝塚市:女性)☆100万人突破おめでとう!(和歌山県海南市:女性:11才)☆いえのれいぞうこにいえでこうてたタマムシがいますムシのところでした(泉佐野市:男性:7才)☆おめでとう(貝塚市二色:女性:7才)☆とんぼの池でうまれたトンボはしんせんだぞ これからもヤゴそだてるのがんばってね(貝塚市:男性:10才)☆百万人とっばおめでとう(貝塚市二色:男性:10才)☆祝・100万人突破!!(貝塚市二色:女性:13才)☆100万人突破おめでとうございます(貝塚



市二色:女性:10才)☆しぜんゆうがくかん100万人おめでとう(熊取町:女性:51才)☆も

っと蝶の見本をおいて欲しいと思います(高石市:女性)☆100万人突破おめでとう(岸和田市:男性:10才)☆よく散歩の途中に寄せて頂いています。生き物に興味を持っているので、家の近所にこういう環境があるとすごく親にとってはありがたいです。週末は楽



しみに来ています(貝塚市二色:女性)☆おめでとうございます(貝塚市畠中:男性:13才)☆イトトンボ

がえさのかをとろうとしているところ。がんばれイトトンボ。しぜんゆうがくかんの人もがんばれ。(貝塚市二色:女性:7才)☆100万人突破!おめでとうございます!100万本のバラをお贈りしたい気持ち★(貝塚



市澤:女性:45才)☆これからも、子供達に色んなことを教えてあげて下さい(貝塚市近木:男性:61才)☆遊学館の行事も、た



まに日曜日実施して下さい(貝塚市地藏堂:男性:60才)

☆箱谷川ハイキングでとても楽しかったのもっと自然や動植物を知りたいと思いました。素晴らしい施設ですね(貝塚市北町:女性)☆100万人の入場おめでとうございます。大人も子供も

自然の生態に少しでもふれあえる



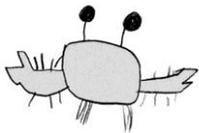
憩いの場所です。職員の方も大変でせうがこれからも、よろしく願います（貝塚市北町：女性）☆静岡市にも、早くこのような施

100万人突破おめでとうございませう。



設がほしいです（静岡県静岡市：男性：55才）☆100万人突破おめでとうございませう。私たちは2回来ました。子どもたちはいつも楽しくいろいろ見学しています。これからも大阪に来たらよります（和歌山県紀ノ川市：女性）☆100万人突破おめでとうございませう。実家が貝塚なので、人ごとではない様な気がします。とてもうれしく思います（熊取町：女性：47才）

☆むかしトンボが見れてうれしかったです（泉南市：男性：8才）☆子供がよろこびました。ありがとうございました（河内長野市：女性）☆こんなステ



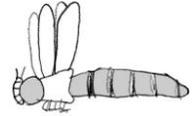
キな博物館があるなんて知りませんでした。国華園に来た帰り寄って

みたのですが、海南市にある自然博物館と少し似ていてうれしくなりました（和歌山県：女性）☆みたことのない昆虫におどろかされよるこんでいます。しぜんと一体になっている感じで、イベントなど、広告や掲示、保育・幼稚園などにのせてください（岸和田市：女性）☆初めて来館しましたが、お金がかからず、近所という事もあり大満足しています（岸和田市：女性）☆だいすきいきもの！（貝塚市北町：男性：6



才）☆貝塚の近木川には、きれいなさかなが住んでいたとはそうぞうもできません（泉佐野市：女性：60才）☆昔は、こうがいもなく川の水もきれいだった、これからも、皆んな川の水を汚さないで、魚がおよいでいるのを、眺めたいです（泉佐野市：男性）☆息子の釣りに付き添ってきたのですが、コンビニを

探して歩いていてたま



たま見つけました。今度は生き物好きの家族でゆっくり来ます。100万人突破おめでとうございませう（堺市：男性）☆もっともっと自然遊学館を知ってもらえるよう広めたいと思います（堺市：女性）☆入館100万人突破いつかな？とにかく おめでとう（堺市：女

イトトンボ

イトトンボが
えさのかま
とろうとし
ているとこ
ろ。
かんばれ
イトトンボ
のせんゆうがくか
んの人もかんばれ。

性）☆100万人

【12年】祝い
申し上げます。
更に継続・持
続可能な団体

に向けて努力されるよう祈っております（貝塚市二色：男性）☆おめでとうございませう。

これからも子供たちにとって、夢とフシギとボウケンいっぱい遊学館であって下さい

（貝塚市地藏堂：男性：34才）☆父といつ

もきて楽しませてもらってます（貝塚市二

色：女性：11才）☆ヘラクレスのひょう本

をみたらぼくもヘラクレスがほしくなりました（貝塚市麻生中：男性：9才）☆100万

人とつばおめでとうございませう（貝塚市王

子：男性：9才）☆おおきくなったら はたら

きにきます。がんばって。（貝塚市麻生中：

男性：6才）

【泉州生きもの歳時記】

エビ 海老

高級食材としてお馴染みのクルマエビは、お正月におせち料理の一品として食べられた方も多いと思います。このエビは体を丸めると体の縞模様しまもようが放射状になって車輪のように見えるため、車海老の名があります。こうゆう縞模様のある種類は、英語では、それが虎縞のように見えることからタイガーエビと呼ばれています。また、エビ・カニ類のグループ（十脚目）の多くは、産卵した卵を腹部に抱き、ふ化まで保護しますが、クルマエビの仲間は産んだ卵を直接海中にばらまきます。面倒見が悪いようですが、そのぶん一度に 100 万粒にも及ぶ多くの卵を産卵する多産家なのです。

さて、このクルマエビの稚エビが二色浜から近木川河口にかけての浅場でもみられることをご存知でしょうか？クルマエビは大阪湾内の重要な漁獲対象種になっていることから、大阪府栽培漁業センターで積極的に稚エビの放流が行われていることも湾内での割と身近に目にする要因になっているかと思えます。浅場で見られた稚エビは、成長につれて徐々に沖合いに生息場所を移します。大きくなったクルマエビは深みの砂泥底に生息し、石桁網いしげたあみと呼ばれる袋状の網に石のおもりおもりと櫛状くしじょうの鉄桁（けた）がついている漁具で海底の砂泥をかく底びき網漁業でカニ、シヤコなどと共に漁獲されています。

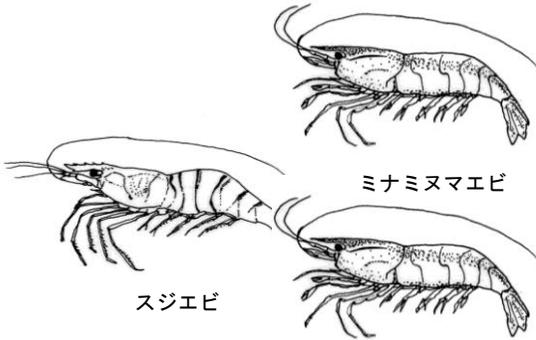


クルマエビの稚エビ

ところで、河川や用水路、ため池などでもピンピン跳ねるエビをタモ網で捕まえた経験がおありの方も多いかと思います。これまで貝塚市内の主に淡水で生息が確認されているエビの種類はスジエビ、テナガエビ、ミナミヌマエビ、ミゾレヌマエビそしてアメリカザリガニです。「田んぼでカブトエビやホウネンエビを見たよ」との声も聞こえてきそうですが、これらは名前にエビとついてもミジンコに近い種類の甲殻類になります。

スジエビとテナガエビは同じテナガエビ科に属し、形態的に似ており、ミナミヌマエビとミゾレヌマエビは同じヌマエビ科に属し、やはり良く似ています。エビの種類を見分けるには、額角がつかくと呼ばれる眼と眼の間の角の棘とげを数えるなど顕微鏡でみなければはつきりしないことも多いです。また、テナガエビとミゾレヌマエビの近木川での分布は、下流の潮の干満の影響を受ける感潮域でのみ確認されています。これらのエビは両側回遊型りょうそくかいゆうで幼生の時代を海で過ごし、一生の間に川と海を行き来するので、本来もっと上の淡水域まで分布していてもよさそうですが、

近木川の一番下流にある堰せきに阻まれ、より上流側へ分布を拡げられないでいるように思います。



(山田 浩二)

■館長コーナー

冬1

「茅葺」屋根は勿論カヤで葺かれます。では、カヤとは？と聞きましても、なかなか正確な答えは返ってきません。辞書などでは、カヤとは、「チガヤ、スゲ、ススキの総称」と記されています。岩湧山に登りますと「岩湧山のカヤを守ろう」という看板があります。それには、オンガヤとメンガヤがあり、大切な文化財の屋根を葺くのにこの山のメンガヤが使われている、だから大切に守りましょうと言う意味のことが書かれています。

話しは全く変わりますが、自然を利用した遊びに「凧あげ」があります。「お正月には凧あげて」と歌われるように、旧暦正月の頃には強い季節風が吹きます。この季節風は太平洋側では、「〇〇おろし」といわれ、一定の方向から強い風が吹きます。だから、凧が大変あがりやすくなるのです。

私は30年ほど前、1年間の計画に「凧の研究」をしたことがあります。時間があれば凧を製作したり、試しにあげてみたりしました。昼では、あげる時間に制約されますから、夜中にあげることもよくしました。人と会うと困りました。想像してみてください。夜中に夫婦が凧あげしているなんて説明のつくことではありません。それに夜中は上昇気流が起こりませんので、なかなかあがりませんでした。

製作は最初の頃は本に出ているモデルを利用しました。やはり研究されたものだけによくあがりました。しかし、次には自分のオリジナルをつくってみたいくなってきます。変わったところでは「蛸の凧」も作りました。これは意外に簡単にあげることができました。大きいものではたて5m横3mのものも作りました。

凧の製作と同様、凧あげという技術も難しいものです。例えば、風のないときの連凧をあげるのはもう不可能に近いのです。風があっても、3~5m間隔でつないでいる凧は簡単にはあがってはくれません。そこで私は、連凧の寸法を2倍に拡大した凧を作り、それを30mほどあげてからその凧に連凧を引っ張らせる手法をとりました。これはなかなかうまくいきました。

さて、小さな凧の話です。ダイア凧で、横5cm、たて7cmほどの大きさです。今ではおそらく市販されていない「改良半紙」を使って作るのです。その骨に冒頭に書きましたカヤ、つまり、ススキを使うのです。よく乾燥させたススキを4cmくらいに切り、それを

円(茎)から見て、16等分すると、幅1.5mmほどの骨が出来ます。この小さな凧は、改良半紙とこのススキの骨でしかうまくいかないのです。

出来上がった小さな凧は室内で面白いようにあがります。岩湧山のメンガヤの穂が風になびいているような感じの流れるような動きです。しなやかでそれでいてしっかりしたメンガヤを使った思い込みも手伝って、なぜか凧にマッチしている感じです。この互いに無関係の言葉は融合し、共に「冬」を表現している感じがしました。

(川村 甚吉)

■投稿

近木川の水生昆虫5:

カタツムリトビケラ

トビケラは幼虫時代に、砂粒や枯葉、枯枝などで巣を造って水中で過ごす昆虫類です。カタツムリトビケラは、その巣がカタツムリの貝殻そっくりで、砂粒で造った巻き貝のような形をしています。貝の仲間でもない昆虫の一種が巻き貝のような巣を造るということに自然の不思議さを感じさせられます。ただ残念なことに、このトビケラは非常に小さく、大きくなってもわずか2mm程度です。この自然の巧妙な細工がほとんど人目に触れることがないのは、たいへん残念なことだ

と思います。



カタツムリトビケラ幼虫

(中央に5個体の幼虫が写っています)

世界からは160種以上のカタツムリトビケラの仲間が記録されています。ところが日本産はカタツムリトビケラ *Helicopsyche yamadai* Iwata、1種だけです。ただし沖縄にいるカタツムリトビケラは、本州のものよりも一回り大きく、別の種であるといわれています。今後、研究が進めば、ほかにも未知の種が発見されるかもしれません。

カタツムリトビケラが見つかったのは、近木川の源流にあたる和泉葛城山の登山道となっている林道です。林道沿いには岩がたくさんありますが、水がしみ出たところがカタツムリトビケラの生息場所となっていました。林道の横には川が流れていますが、そこからはまったく見つかりませんでした。このようにカタツムリトビケラはほかのトビケラと違って、流れのあるようなところには生息しないようです。



カタツムリトビケラの生息場所

5月(2005年)に初めて見つけたときは、幼虫でしたが、6月になると幼虫のほかに、巣を岩の上に固着させている蛹を観察することができました。7月は蛹だけが見つかり、8月に巣を採集してみると、すでに羽化したあとでした。9、10月には小さな幼虫を確認しているので、カタツムリトビケラは7月から8月の間に成虫になっているものと考えています。

大阪府下では、貝塚市のほかに高槻市、茨木市、箕面市、河内長野市で見つかっています。お隣の京都府や兵庫県ではレッドデータブックに掲載されていて、どこにでもいる種類ではないようですが、大阪府内でもほかの生息場所が見つかると思います。

(茨木市 青柳 正人)

■寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2005年12月分まで)

- ◆多田理さんより
貝塚市大川 産
アカショウビン死体1点
- ◆京西孝子さんより
貝塚市二色 産
キビタキ♀死体1点
- ◆芝田修さんより
関西国際空港場周道路 産
セアカゴケグモ死体3点
- ◆石井葉子さんより
貝塚市橋本 産
ヒヨドリの巣1点
- ◆小田清彦さんより
貝塚市二色浜 産
クロベンケイガニ生体1点
- ◆高野晴一郎さんより
貝塚市蕎原箱谷 産
ウスバツバメガ成虫1点
- ◆北田誠さんより
貝塚市蕎原箱谷 産
ツクツクボウシ♀成虫1点
- ◆木室仁太さんより
貝塚市蕎原 産
カジカガエル1点
- ◆福岡武司・怜奈さんより
熊取町七山 産
ワモンゴキブリ成虫1点
和歌山県有田市 産

ウスバカゲロウ蛹 5 点、幼虫 1 点
(うち羽化 2 個体)

◆真鍋誠志郎さんより

貝塚市二色 産
ヨモギハムシ成虫 1 点

◆入口望さんより

和泉葛城山山頂 産
ヨモギハシロケタマフシ 1 塊

◆足羽哲哉さんより

貝塚市二色 産
オオカマキリ卵囊 1 点

◆西村恒一さんより

貝塚市蕎原 産
ムラサキツバメ成虫♂1 点、♀1 点

◆和田真人さん・足立京子さんより

貝塚市大川 産
ニシカワトンボ幼虫 2 点
ヤマサナエ幼虫 3 点
ダビドサナエ属の一種幼虫 1 点
オニヤンマ幼虫 1 点
コシボソヤンマ幼虫 1 点
ミナミヌマエビ生体多数
イモリ生体 1 点

◆鈴子佐幸さんより

岬町深日港 産
マダイ生体 2 点
イトヒキハゼ生体 2 点
タマガンゾウビラメ生体 1 点
ヒカリウミウシ生体 1 点

■遊学館スタッフ日誌

10 月 27 日 大阪でも急速に生息域を拡大しているアライグマ。捨てられたペットが繁殖し、どんどん増え、昨年には特定外来生物に指定された動物です。農業被害だけでなく、直接日本の在来の生きものを捕食したり、巣穴を乗っ取って生態系の脅威となっています。貝塚市でも数年前から確認されていますが、この日農林課の三味さんと麻生川さんから始めての標本が貝塚市役所から届けられました。貝塚市地藏堂産のオスです。近いうち、骨格標本に組み立てようと考えています。(西)

10 月 27 日 近所の釣具店から、飼育しているマダコが水槽の壁面に産卵し、このままだと水槽の掃除もできないので困っていますとの連絡を受けました。見に行くとふさふさとした卵塊を前に母ダコが懸命にガードしています。可哀想でしたが、母ダコをネットで捕らえ次に卵塊をそぎ落として運搬し、自然遊学館の水槽に移し飼育を試みました。しかし、よほどショックだったのか翌日死んでしまいました... 合掌。ちなみにタコの卵塊は、その形がフジの花のようなので海藤花(かいとうげ)と呼ばれます。(山)

11 月 14 日 貝塚市でナベヅルの目撃情報があり、湯浅さんと清児の田んぼの現場に向かいました。眼をこらして遠くを見ると、それらしき 3 羽を確認し、双眼鏡で確かめま



(鈴子佐幸さん撮影)

した。ファミリーらしく、1羽はまだ幼鳥です。それぞれちょこまか歩いてはくちばしで土を掘り、エサをついばんでいる様子

でした。実は先立って11月3日に岸和田市の久米田池でこのナベヅルの飛来を5羽確認していたのですが、そのうちの3羽のようです。今まで、大阪ではナベヅルが飛来した記録はないようで、環境省のレッドデータブックでは絶滅の危険が増大している種として絶滅危惧Ⅱ類にあげられています。(山)

11月25日 貝塚市立東小学校の川上先生が拾われた、タシギの死体を浦川先生が届けて下さいました。川上先生が拾われた時には、これどないしょ？ということで、一度、廃棄物処理場へもちこまれたそうですが、処理場の方が自然遊学館の存在を教えて下さ



いました。タシギは無事、館の標本に仲間入りしました。これから本剥製になる予定です。(宮)

12月26日 自然遊学館には1万点を越える昆虫の乾燥標本が所蔵されていますが、データベースに登録して正式なラベルを付けたのは7500を越えたばかりです。博物館として誠に恥ずかしい話ですが、これまでに自然遊学館に寄贈されたもので、公表に至

っていないものも残されています。2005年は約1700点の登録をしましたが、2006年はどうなることでしょうか。(岩)



ありがとう



学校帰りにふらっと「手伝いしにきた～」と立ち寄ってくれる田中くん、いつも丁寧な仕事をありがとう。タヌキの骨格標本づくりの手伝い、水槽の水替え、まるで学芸員実習生のようなはたらきっぷりです。浅井真紀子さん、夏美さん、いずみさん、おいしいおやつと生きもの情報、いつも届けてくれてありがとう。

■おしらせ

入館者が100万人を突破！

1993年10月23日に開館した当館の入館者数が、2005年11月5日付けで100万人の大台を突破しました。この小さな博物館とともに学び、ともに楽しみ、支えて下さった市民のみなさんに心から感謝します。これからも「貝塚の自然」にこだわった、身近で親しみやすい地域の博物館であるよう努力していきます。どうぞよろしくお願ひします！

★記念イベントを開催しました！★



さて、このうれしい記念日のお返しに、11月12日から27日にかけて記念イベントを開催しました。貝塚市畑で撮影されたミヤマアカネをあしらった「生きものカード」を来館者全員に配布し、さらに応募券に名前を書いて応募した人の中から抽選で30名に鳥や魚、昆虫などをデザインした自然遊学館特製の七宝焼きアクセサリーをお贈りしました。

応募総数は172名、市内からは80名でした。東京都や静岡県、広島県の方がいらしたのには驚きました。

応募用紙の裏にはメッセージコーナーがあり、たくさんのお祝いの言葉や絵が寄せら

れました。すべてを11・12ページに掲載しましたので、ご覧下さい。みなさんありがとうございました。



100万人記念の七宝焼きアクセサリー

(自然遊学館職員一同)

自然遊学館だより 2006 冬号 (No. 38)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 0724 (31) 8457

Fax. 0724 (31) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2006.1.13

この小冊子は庁内印刷で作成しています。